

五月十七日

午前の便でバンコク経由プノンペンへ。全て定刻通りで何の感慨もなし。プノンペン空港に学生が迎えに来てくれた。三〇分程待つうちに香港経由の平岡広島前市長グループと会う。広島グループ旅行社のバスでウナム寺院へ。彼等はホテル、私は学生達と渋井修八ウス泊。私の院生、広島から参加の学生、総勢十五名。ここはもつと密度高く空間を使えば三〇名は合宿できるな、の実感を得る。屋根の上のテラスにゴザをしいて寝る。風通し良く実に快適である。カヤを吊った。夜中雨が降ったかも知れぬが、眠り続けた。

ここで小笠原ナリアキ氏に初めてお目にかかる。六十四才のオリジナル、ヒッピーの面影あり。アジア中を歩き廻って身体でユーラシアを知っている人物のようだ。

十八日

朝、五時半起き。久し振りに深く眠れたような気がする。渋井さんのところの子供達が起きて掃除を始めるのと同時に起きるのだが苦にならぬ。トレンサップ河の方向の朝焼けが美しい。六時過ぎに、ゾウリをはいて、少し歩いてタンメン・レストランへ。美味である。小笠原さん、まことに人なつこい人で近來稀にみる好人物である。渋井さんと同種族の、要するにガキ大将がそのまま大人になったタイプの人間で、最近では滅多に会えない類

の人間である。七時半より、ひろしまハウス現場で学生達とレンガ積み。意外に学生も良く動く。昼食後も働くが、コレは少し無理かも知れない。何しろ暑い。こちら風に過ごさなければ体がもたぬだろう。明日から午後は昼寝と自由時間にしようと思つた。夜は九時にはゴロリと寝てしまふ。良く眠れる。余程、我ながら東京では疲れているのだろう。東京じゃロクな暮らしをしてネエーな、とブツブツ言いながらいつの間にか眠った。

十九日

学生の大半は下りをして、体調を崩しているのが判明。恐れていたことが現実になった。ヤッパリ、今の学生にはアジアの風は合わぬのか、無暴だったかと心配するが、もう仕方ないのだ。小笠原さんと原因を話し合うが、私も小笠原さんも何ともないのだから、メシや水に原因があるわけでは無さそうだ。学生の抵抗力の弱さを再認識して、今の日本社会のひよわさを真の当りにした感あり。幼稚園、小学校あたりの教育、そして親の育て方も悪いに決まっているのだ。丁度、私くらいの年の親達なのだから、考えてみれば私達の世代の弱さにつながるのだろう。我が家の長男も、昔カルカタからの帰りにゲロゲロ吐いていたから、あんまり他人の子の事も言える立場ではない。しかし、アノ時ウチのガキは五才くらいだったのだが、五才も二〇才も同じか、今は。

二〇日

S君、発熱完全にダウン。これで早く東京に帰る私のスケジュールは壊れた。マ、たまには良いだろう。一人つきそいで居残りさせて、他の学生は二泊でアンコールワット見物へ出掛けた。午前中、ナショナル・ミュージアム。古代クメールの、特に彫像の美事に驚く。エジプトの彫像との類似があるような気さえた。ヒンドウのリングで牛の顔を上手に組み込んだモノが

あつてそれも見事だった。

二十一日

午前中ひろしまハウス駆体工事の補修箇所を全部チェックする。所々二〇センチくらいの間違いがあるが、別に驚かぬように決めてしまった。アジアだ。デザインの精密さを叫んでも仕方ない。大らかさ、良い意味での大まかさを学ぶしかない。二階、三階、四階、屋上を巡り、完成像に大きな狂いがないかをチェックする。まだまだわからぬところもあるけれど、狙い通りになってくれる可能性があるのを確信する。仕上げを、どれ程荒々しくできるかがポイントだろう。

夜は小笠原氏と日本のNGO経営のオリガミレストランでトンカツを喰う。腹をやられていたS君もようやく快方に向い一安心。何年前だったか、ラウンド・アンナプルナのハードトレッキングで高熱を出し、ラマ教寺院で三日程寝込んだ事を思い出したりした。恐らくあの時は腸チフスになってたのだろうが、四十二、三度の高熱が三日間続いて、天井のチベット絵の原色がサイケデリックに高熱の中に浮いたり、沈んだりしていたのを記憶している。病は人に普段気付かぬ事を教えるものだから、S君はウナロム寺院の三日の発熱を上手に役立てられたら良いだろう。体も気持ちも健康な人間の大半はただの馬鹿なんだから、上手に病気状態が続けられたら良い。

二十二日

一人で現場を丹念に見て廻り、最終確認の、その又確認をする。

ウナロム寺院境内の、この場所に建築を建てる機会を得られた事を感じたい。

午後、アンコールワットより学生戻る。元気そうで良かった。

ただし三名の女子学生がシエムリアップに残ってしまった。しかも、一番鈍感なのが三名だ。恐ろしいのは危険を危険と思わぬ鈍感さなのだが、マ仕方あるまい。もう大人なのだから、自分の事は自分で仕末してもらうしかない。

夕方、空港へ小笠原氏に送ってもらおう。

ここ数年来無かつたくらいに良く休養した五日間だった。

ほとんど何も考えずに、モンスーンの風に吹かれて良く眠った。流石に我ながら、いささか年を取ったから、妙な感傷や、感慨にふけることもなく、ただただひたすらに休み、休み、休み。

テラスで休んでいるすぐ隣が自分の建築現場なので、さらに休みが深くなるような気分もある。建築家のただの貧乏症なのかも知れないが。未完の現場を持つ、不可思議極まる力だなコレワ。きつと完成してから、ここに来て泊ってもこんな気分は味わえないのだ。

プノンペン空港の待ち合い室で、平岡さんに再会。香港経由で帰国との事。呼びとめられて、石山研の女性が三人バイクタクシーで動き自由行動をとってしまうだろう旨を告げられ、非常に心配だと、残念だと警告されてしまった。全く面白い。アノ馬鹿女たちは本当に何を考えているのか。日本の若い女性がどれ程、鈍感腰軽ギャルだとモノ笑いになっているのをアレ程教えたと言っのに。もしも、何事も無く戻ってきたとしても、これからの私のプログラムからは彼女たちは外そうと決心した。馬鹿は自分の馬鹿を自覚できぬと永遠に馬鹿のマンマなのだ。つける薬の無い馬鹿の恐ろしさを教えられる。

バンコク経由で二十三日午後成田着。

「ひろしまハウス」の第一の意味はブノンペンのウナロム寺院境内にある事。生きている仏教寺院境内に建つ建築だと言うことか。なにしろ周囲は非近代の群だ。ストウパーもゲートもナーガの彫刻も、何もかもに濃い意味があつて、しかも私には理解できない。アジア、それも南アジアの建築の特色は、ほとんど自然との区別がつかなくとも人間は生きてゆけるといふ事だろう。自然の力が豊かだから人間は一年中裸で暮すことができる。大方のヨーロッパの建築のように厚い壁で自然と人間の生活の場所を区切る必要がない。むしろ区切らぬ方が快適ですらある。ウナロム寺院境内で少しばかり暮してみても良くわかつた。雨期が始まつたばかりのシーズンだったが、わたしは昼も夜も建築の外で暮していた。それで快適に暮せた。雨さえしのげれば南アジアの建築に壁は必要ない。時に少しばかりのプラインヴァシーが確保できれば、それで良い。それ故に「ひろしまハウス」には一切ガラスを使用しない。窓は光と風をとる穴でよい。ガラスは風をさえ切る。自然の力を使うのに適した材料ではない。

この建築には空間はあるが、内と外との区別が論理的に一切排除されている。無数の穴があつて、建築はその穴によつて呼吸している。

第二に、機能があやふやであること。前向きに言えばフレキシブルであること。一階は今度行つたら「空飛ぶ車椅子」財団の工作室になつていた。地ライで足をフツ飛ばされた人たちの為の自転車、車椅子製作工場だ。二階は宿泊施設、及び事務室、三階は、今のところギャラリー、あるいは美術館。四階は子供の家。三階の一部には病院がきても良いだろう。AMDAのエイズ研究室でも良いのではないか。

第三に、どうやらこの事が一番大事な事のように思われるのだが、この建築はどうも完成しそつにない事。永遠の未完を生きそつなこと。

私もすでに未完の世田谷村に住み暮しているが、建築は何故完成する必要があるのだろうかの疑問が時に頭を持ち上げる。完成させるのは税金の使い方の問題や、建設業者への支払い方法の問題に過ぎぬのではないだろうか。完成と同時に建築は死亡する。ゆつくりと壊れてゆく運命をたどつてしまふ。この宿命から自由になる方法はないのか。

ツリーハウス。十勝ヘレンケラー記念塔、ひろしまハウス。聖徳寺霊園。星の子愛児園。

これ等の建築を「治療の建築五部作」としてまとめようとしているが、その意味は何か。技術は明らかに一方的に進歩し過ぎてしまつた。人間の身体能力をはるかに超えて肥大化している。人間は主体として科学技術をすでに統御できなくなつてゐる。その典型が原子力の問題であり、各種兵器とその傘下にある技術である。

近代建築はすでに進歩を自己目的化してから久しい様式である。初期の社会的理念、すなわち技術の平準化の理想は失落して、何の成果も得られなかつた。二〇世紀末の建築デザインも又、技術的進歩を自明の成果として自己目的化、自閉した。何の為のデザインなのかハッキリしない。

つまり、すでにそれは治療の対象としてある。肥り過ぎ、高血圧、ストレス性疾病と同様に治すべき対象としてある。

建築の目的、つまり機能そのモノも治療の対象であり、それをこの五部作は示そうとしている。

治療の方法が、オープン・テクノロジーであり、オープン・デザインである。この事を明快に総合化しながら要約する必要がある。キチンとした言説としてまとめなければならない。私の建築が常に色濃く批評的な性格を持ち続けた意味はそこにあつて他には無いのである。

書き継いでいる磯崎新論のタイトルは変える必要がある。磯崎自身の言説にもあるように「都市破壊業KK」について述べている磯崎を誰も本気だとは信じなかった。何年か前に、北京の人民大会堂で毛沢東の矛盾論をミッキーマウスの自己撞着として徹底批判しようとした磯崎も然りである。磯崎の利ハツさにだまされてはいけない。磯崎の利ハツさ、聡明さは彼にとって誇るべきモノでは、どうやら無い。彼は自身の利ハツさを本当はかなぐり捨てたい類の人種なのではないか。彼は自身の知性、知的能力を時にわずらわしく想う、革命家の精神を持つ破壊者でもある。日本のリーディング・アーキテクトである事がその正体にいつも衣をかぶせ続けてきた。彼は丹下とは異なるタイプの人種である。そのカオスを書き切れたらと思うのだが、タイトルが良くなかった、磯崎新論ではダメだ。

例えば、建築殺人事件とか、コルビュジエを殺したのは誰か、とか、ミケランジェロ公暗殺とか、昔、坂口安吾が試みて失敗したやり方と、タイトルを考えてみる必要がある。

ウナロム寺院の五日間は大きなエネルギーをくれたのかも知れない。停滞しがちだった思考にねじれと飛躍が戻ってくる兆しがある。この機を逃さぬようにしたい。